

シリーズ・馬電の思い出

⑥ 『ふとん乾燥機』誕生秘話

… NHKプロジェクトX風・バージョン



ふとん乾燥機 AD-600形

睡眠中に人体より発散される水分は、一晩で牛乳瓶一本といわれている。そのため天日に干したふとんは気持ちいい。だから梅雨時や太陽を見ることの出来ない冬場の豪雪地帯、そして住宅事情によって干す場所のない家庭にとって、敷いたまま天日乾燥と同等の効果が得られる家庭用「ふとん乾燥機」は、最高の福音であった。

当初このふとん乾燥機は、三菱電機中津川製作所で開発研究されていた。外部よりアイデアの持ち込みがあったもので、「ヘアードライヤーをふとんの中に入れてかわかすと具合がいい」。そこから開発がスタートした。開発者は、ふとんの中全体に均一に温風を吹き入れる方法に苦労した。ビニールパイプに穴をあけたり、ビニールシートに穴をあけたり…と、いろいろ試行錯誤の末、ジャバラホースで布袋の中に温風を吹き入れる方式に落ち着いた。当時ふとん乾燥機には、「ふとん乾燥車」の中にふとんを入れて乾かすものと、鉄棒にふとんを掛けて周囲から温風を吹き付けて乾かすものがあったが、いずれも外から温風で乾かす方式であり普及していなかった。このふとん乾燥機は全く逆の発想だった。

試作品が完成した。早速主婦対象のグループインタビュー調査が行われた。いつでも天気を問わず乾燥できる点は好評だったが、敷いたまま室内で乾燥させる点に抵抗があり、全体としてあまりいい評価ではなかった。開発はそのまましばらく見送られていた。

昭和51年8月、中津川製作所の技術部長「K」が群馬製作所の副所長として群馬県尾島町にやってきた。同時にふとん乾燥機の開発も群馬製作所に移管された。

「K」は早速、ふとん乾燥機の開発にとりかかった。9月には最終仕様が決まり、12月北陸3県でテスト販売が実施された。この年は記録的な豪雪であった。1000台のテスト販売用は、またたく間に売れた。テスト販売を札幌、東北、新潟に拡大したが、調査より物よこせの状態が続いた。

昭和52年4月全国発売。この時の営業所の販売見込みは、年間10万台であった。

「K」は一喝した。30万台にしろ！

北陸での購入者の追跡調査が報告された。96%の人が評価85点以上。ほぼ全員の人が、他の人に薦めたい。申し分のない満足度であった。まもなく販売計画は、60万台に修正された。

全国発売すると、まもなく全国の販売店から直接工場に出荷の督促が相次いだ。生産が追いつかない。製品のとりあいとなった。なかには工場にトラックで製品を取りに来る店もあった。

「K」は、発売後すぐ大增産とともに、モデルチェンジと機種系列拡大の指示を出した。他社の追随を感じていた。6月、案の定他社が同じような商品を出してきた。

この年の梅雨は幸い長雨。一気にふとん乾燥機の傘が開いた。マスコミがこぞって取り上げた。

「売れて、売れて」「市場一気に急上昇」「意外？なヒット」「主婦に大もて」…新聞にこのようなコピーが躍った。

9月、第二弾の新商品を発売した。普及タイプ・高級タイプ・業務用タイプの3系列だった。これで一気に他社を引き離れた。10月にはほぼ全メーカー出揃い、「ふとん乾燥機」の市場が確立された。

結局三菱は、この年、修正計画の60万台を売り切った。それまで尾島の工場は、古い建物にすすけた煙突だけが目立つ赤字工場であった。それがこの1年で大幅な黒字工場に変わった。

巷では、このような言葉が聞かれた。「潜水艦が空を飛ぶ」。

その後尾島の工場は、このふとん乾燥機をきっかけに「オープンレンジ」「石油ファンヒーター」など次々に新商品を世に送りだしていった。
(篠崎 記)